図書紹介（67）

『雅楽「源氏物語」のうたまい』佐藤浩司、道友社編、2012年

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

３月１日に出版された本書は、見た目に美しく、読むに楽しい装幀と中身になっています。特に第１章は、見開きでひとつのトピックが取り上げられていますので、どこからでも読みはじめることができます。雅楽初心者にとっても、雅楽愛好者にとっても嬉しい配慮といえましょう。紫式部に語ってもらうという叙述は、天理大学雅楽部がこのところの定期演奏会で用いている手法と同じです。

「源氏物語と雅楽」と題された第１章は、まず、「管絃」「舞楽」「謡物」が、それぞれ「詩歌管弦は貴族のたしなみ」「儀式に彩りを添える華麗な舞」「物語の背景を描き出す平安の流行歌“催馬楽”」として纏められています。本書によれば、源氏物語には、管絃７曲（延べ９曲）、舞楽14曲（うち高麗楽２曲、延べ22曲）、催馬楽23曲（延べ59曲）が描き出されているということです。また、催馬楽の「東屋（あずまや）」「梅枝（うめがえ）」「竹河（たけかわ）」「総角（あげまき）」は巻の名前にもなっています。ここでは、25曲が取り上げられ、雅楽で源氏物語を味わえるように仕上げられています。

第２章は、雅楽の基礎的な知識が、エピソードと共に紹介され、「雅楽物語」と題されています。たとえば、雅楽の歴史は３回にわけて取り上げられ、その第１回では「雅楽」という用語の解説から始まります。音楽そのものに雅やかとか正しいとかの区別はないものの、雅楽の「雅」は「正しい」という第一の意味を持っていること、雅楽という同じ言葉を用いてはいても、漢字文化圏である中国、朝鮮半島、インドシナ半島などではそれぞれ違った意味を持っていることなどが紹介されます。また、雅楽の形式や雅楽で用いられる楽器についての解説も大変分かり易いものになっています。さらに、「雅楽人物列伝」として、10のエピソードが添えられています。

さて、2001年から「源氏物語」の中で描かれた雅楽を取り上げ、定期公演で演奏してきた天理大学雅楽部は、創部60周年を迎えました（昭和26年創部）。本書の第３章は、その雅楽部の歩みを総括したともいえる「雅楽部物語」となっています。

ここでは、雅楽部創部のいきさつから始まり、定期公演のこと（第１回は昭和41年天理で開催、現在は東京、大阪でも実施）、西洋音楽など“異種共演”を通して得た感動や学び、また、廃絶した曲や舞を掘り起こし、試作復元にチャレンジし続けていること、手作りの装束、面、舞台装置そして海外公演（昭和50年が第１回、韓国、香港、台湾で公演、平成23年の中国・西安公演で23回を数える）という体験が綴られています。

例えば、雅楽部の特筆すべき活動の一つ「廃絶した曲や舞を掘り起こす」時には、遺されている一部の楽器の譜を頼りに、ほかの楽器の譜を考えて曲を復元したり、また、舞の復元では、舞譜を解釈しながら復元したり、舞譜がない場合には実際に演じられているほかの舞を参考に創作するということです。

こうして一つひとつのことは、それぞれに大変創造的ではありますが、とても骨のおれる地道な取り組みであったろうと思われます。しかしながら、「雅楽の魅力を伝えたい」という思いや雅楽に携わってきた喜び、達成感、感謝などが学生たちを奮い立たせてきたとも感じられます。そして出来上がったものは彼らの財産になっていきました。本書にはそういう学生たちの演奏が収められたDVDも付いていますので、彼らの活躍を動画で見る楽しみも味わえます。

著者は「学生の域を超えてユニークな活動を続ける雅楽部の六十周年の節目に、何かできないかという話しのなかから、本書の出版が企画されたのです。今日、雅楽の概説書はそれほど多くありませんが、そこそこあります。それゆえ、単なる概説書ではなく、これまで馴染みのなかった方にも親しんでいただけるものを目指しました」（あとがき）と言っています。実際、雅楽部員たちの公演写真とともに細川佳代さんの可愛らしいイラストは、読者を雅楽の世界に誘ってくれているようです。